

なんで、あたしがこんな事をしているんだ。標高2m程度の雪山の影に隠れながら、ザン・エルフは舌打ちした。彼女の周囲では、カラフルな毛糸の帽子を被った5、6歳くらいの子供達4人が、高さ50センチくらいの雪の壁に隠れながら、雪の玉を握っては投げ、握っては投げしていて、時々大声を上げたり、わざと我が身をさらしたりして敵を挑発していた。雪山のバリケードの向こうからは、雪玉が散発的に飛来し、ザン達の上にばらばらと雪を降らせた。ザンは、子供達のきやあきやあという嬌声に混じって、憎ったらしい大食い靈感女の指図する声が聞こえて、もう一度激しく舌打ちした。

世界に冠たるカール帝国の首都バウムクーベンも、ひとたび雪が降ればほとんどの交通がストップして、孤立した都市となる。大陸横断鉄道も、乗り合いバスも、シューターも、雪の布団を被って眠ってしまうのだ。だから、町はとても静かで、屋敷の2階の窓から通りを眺めていた少女が、自宅を訪れた子供達の大声にうたたねから引き戻されて、不機嫌になるのも仕方のないことだった。

「なんだ、お前！」

ザンは、扉の向こうに立っている、黒というよりは青みがかった髪少年に、明らかに不快な表情を見せた。ザンは、彼の事をよく知っていた。母親代りのミレーネに聞かされていたからだ。なんでも、魔道とも異なる特殊な能力の持ち主らしい。名前は確か、じよたとかいったな。

「近所の子供達と雪合戦をするので君も来ないか？」

じよたが言った。

「はあ？」

ザンは、自分の細い目を精一杯こじ開けると、じよたに顔を近づけて睨んだ。

「何がかなしうて、お前達と雪合戦せにやららん？」

ザンは、じよたにさらに近づく、今にもかみつきそうな勢いで言った。

「この辺は、戦争の孤児が多いから、年明けくらい一緒に遊んであげて、食べ物振る舞ってあげよう。」

振る舞ってあげるだと、じよたのこのセリフにカチンときたザンだった。ザンも孤児であり、ミレーネに拾われるまでは施設で育てられたひとりなのだ。

「あたしは、施しなんかいらねえよ。」

「ザン、行ってらっしゃい。」

ザンの背後から、ミレーネの声が出た。ミレーネは、ザンが反論するよりも早く、彼女に海獣革製のコートを着せ、耳に風よけぼんぼんを付けてやると、彼女を玄関から押し出した。

さくさく広場は、一面の雪に覆われていた。そして、そこかしこに、雪の踏み具合を確認する子供や、雪だるまを作ろうと大きな雪玉を転がす子供、走り回っては雪の中に突進したりしている子供がいてにぎやかだった。

その広場のずっと奥、魔の森にほど近い場所にそれはあった。それは、1辺20mくらいの正三角形の頂点に、標高2mくらいの雪の山がこんもりと盛り上げられたフィールドで、雪山の両脇や、三角形の内側には、高さが50センチくらいの壁が作られていた。どうやら、この3つの雪山が陣地で、そこから雪を投げ合うようだ。ザンは理解した。

「じゃあ、みんな集まれー！」

憎たらしい女の声が出た。ザンは、舌打ちすると声を発した女の方を見た。女は、白いファー付きの赤いコートを着て、両手には、うつつすらと光る魔道の手袋をはめていた。暖かいんだろうな、畜生！ザンは、彼女のことによく知っていた。彼女は、竜族によって滅ぼ

されたドリムランドの小国家、チェロンの姫君で、名前はシェリル・フル・フレイムという。さっきの青い髪の少年は、この姫の付き人をやっている。もともと、巷の噂ではこの二人はもう出来ていて、付き人というよりは恋人と表現すべきとのことだったが、ザンの見立てでは二人はやっぱ友達以上恋人未満だった。まあ、いずれは一緒になるかもしれないが、そうなった場合の尻の敷かれ具合というのも、彼のこき使われ方を見れば大体想像できた。

「はい、ちゅーもくー！」

シェリルが両手を挙げて左右に振りながら叫んだ。

うるさい女だ、とザンは思った。三角形の陣地の中央には、いつの間にか子供達が集まってきていた。ザンが驚いたのは、子供達の中には明らかに人間以外の種族が混じっているということだった。妖魔が、4人、いや5人か、とザンは思った。妖魔の子供など、自分の戦闘力でも倒せないことはないが、ひとり筋骨たくましい女がいて、こいつだけは正面から渡り合うのはやめようと思った。彼女は、ザンの視線に気がつくのと、にこりと微笑んで首をかしげた。その時、ザンは見た。彼女の口からはみ出ている白い牙を。ヴァンパイアなのか？くわばらくわばら。ザンは、素直に視線をそらすと、雪の上でびよんぴよんはねている姫君の方を見た。

「では、ルールを説明します。」

シェリルが張り切って言った。

それによると、この雪合戦は、3チームに分かれて戦うらしかつた。それぞれ三角形の頂点に陣取り、フラッグとなる子供を守る。このフラッグを奪われるとそのチームの負けである。それから、アタッカー、シューターという攻撃部隊が各2，3名いる。フラッグを奪うことができるのは、アタッカーだけである。彼らは、雪玉に当たっても死なないが、雪玉を投げることもできない。また、雪玉に当たった場合は、即座に陣地に戻らなければならない。シューター

「は、その名の通り雪玉を投げる役割である。フラッグを奪う権限は無いが、近づいてきた敵兵を雪玉で攻撃することができる。彼らが敵の雪玉に当たった場合、2回までは陣地に戻ることができる。そういうのを命3つルールという。ちなみに3回目は退場である。結構おもしろそうじゃないか、ザンはそう思った。フラッグ役は、まだ走ることのできない小さな子供がなり、せつせと雪玉を作る手伝いをしていた。よく考えているなと思ひ、ザンは少しだけ優しい気持ちになった。

「じゃあ、陣地は私が決めるね。魔の森に近い方は、チャイム、あなたのチームでお願いね。はい、魔界の貴族さんチーム、陣地に集まってください！」

「そうか、あいつがチャイムか。ザンは、さっきのヴァンパイア風の女が、妖魔の子供達と手をつないで歩いていくのを眺めた。彼女の名前は聞いたことがあった。真っ赤なシューター、クルセイダーツを転がすクレイジードライバーにして、モンスターレースの優勝経験者。ちっ、クールだぜ。」

「はい、次は私のお姫様チームですよ。みんな、こっちの陣地に集まれー。」

わーっとシェリルの周りに子供達が集まっていた。気がつくくと、ザンの周りには2、3人の子供しか残っていなかった。一人は真っ赤な毛糸の帽子に、真っ赤な鼻をした5歳くらいの男の子。名前はカンパチといった。八男なのかな？すごい大家族だなとザンは思った。もう一人は、雪のように色白で、ひよろつとして頼りないモヤシという小学生だ。彼は、風が吹くたびにゆらゆら揺れていた。貧血なのではないか、病気なんじゃないかとザンを心配にさせる。大丈夫なのか？そして、もう一人は、さっきから黙々と雪玉を作ることに夢中になっている3、4歳の子供だ。名をミョウガという、らしい。本当か？性別は不明だ。彼？は、ザンの顔を見上げると、ニ

ヤーと笑い、たこ焼きと言った。

「そうだなあ、これはたこ焼きみたいだなあ。」

ザンは、ミョウガのそばにしゃがむと、彼と一緒にたこ焼き焼き器みたいな入れ物に雪を詰めて雪玉を作るのを手伝った。彼女は、子供と一緒に作業をすることで自分が癒されるような、単純作業のせいでトランス状態になるような、そんな気分がとても気持ちよかった。こら、お前。雪玉食うな！

「あら、盗賊さんチームの人数が足りないわねえ。」

ザンは、シェリルの言葉にむっとして立ち上がった。

「おい！誰が盗賊だ！」

ザンは、シェリルに向かって半身を切ると、細い目を開いてぎつと睨み付けた。それを見て、青い髪の少年が、少女に何かささやいた。少女は、ちよつとうつむき、嫌だなあという表情をあらわにして、再度宣言した。

「げふん、げふん！：失礼。暗殺者チーム、人数調整！」

ザンは、もう何も言う気が無くなって、その場にしゃがみ込むと、ミョウガの雪玉作りを手伝った。それに、暗殺者ってのは、間違いないしなあ。

ぴりぴりぴいー！

試合開始のホイッスルが鳴った。3つの陣地からは、一斉に歓声が上がり、そして、雪玉が飛び交った。

「ようし、シューターのモヤシ！お前だ！どんどん投げろ！寝てる場合じゃない！」

ザンは、子供達の背後に立って全体を見渡すと、それぞれの的確な指示を出していった。ゲームは始まったばかりで、今のところお互いのシューターが牽制球を投げ合い、アタッカーを出すタイミングを見計らっている。

「カンパチ、あたしと一緒に突撃するぞ。」

ザンは、アタッカーのカンパチを引き連れ、憎ったらしいシェリルの陣地に攻め込むつもりだった。自分がアタッカーにならなかつたのは、雪玉をシェリルにぶち当てるためである。しかし、その相棒のカンパチの様子がおかしかつた。どうも、落ち着きがない。

「どうした、カンパチ！」

「お、おおお！」

「お？どうした？」

「おしっこ！」

「：その辺でしてこーい！」

ザンは、単身シェリルの陣地に突撃した。壁の向こう側からは、散発的に雪玉が飛んでくるが、シューターの肩が弱いせいか山なりの軌道をなし、当たる気がしなかつた。よし、目にも物を見せてくれる。と思ったその時、彼女は左半身に連続して鋭い衝撃を感じて雪の中に突っ伏した。それは魔界の貴族さんチーム、チャイムからの攻撃だった。

「言い忘れてましたー！」

シェリルの声である。

「お姫様チームと魔界の貴族さんチームは、同盟軍です。」

ちつくしよう！そんなのありかよ！ザンは、ようやく立ち上がると、痛む左腕をさすりながら陣地に戻つた。

陣地では、相変わらずモヤシが横たわり、ミョウガが雪玉のたこ焼きを作つて食べていた。

「こらモヤシ。寝るな！それとミョウガ。雪玉食うな。」

その時ザンは、ピンと閃くものがあつた。たこ焼きには、タコを入れなくっちゃな。ニヤリ。

ザンは、女性にしては筋力値が高かつた。握力も相当なものである。彼女は渾身の力を込めて雪玉を握つて氷塊を作ると、それをコアにしてミョウガに雪玉を作らせた。

「ケケケ。シェリル、今に見てる。」

そこに、青い顔をしたカンパチが駆け込んできた。

「お、おねえちゃん」

「ん？どうした、カンパチ。またおしっこか？」

カンパチは、首をふるふると横に振った。

「う、ううう：」

「う、う？まさか、それは、こらえてくれ！」

ザンは、カンパチをみんなから離れた場所に連れて行ったあと、特性雪玉をゴツゴツ作ると、それを握ってシェリルの陣地へ走り出した。今度は、チャイムの陣地も警戒している。これだけの距離が離れていれば、運動神経の良いザンなら、たいていの玉はよけることができるだろう。彼女は、雪山の横に立ってキーキーと指示を出しているシェリルに向かって、渾身の力をこめて雪玉を投げつけた。

がっ！

ザンは、その音を聞いたとき、背筋がぞくりっと寒くなるのを感じた。やっちゃった、と思った。雪玉は当たった。よけたシェリルの背後にいた、フラッグの子供の頭に。

「あー！ーん！」

子供は、火がついたように泣き出した。

「たーいむ！」

シェリルは、両手を頭上でクロスさせるとそう宣言した。そして、すかさず怪我をした子供に神聖魔道をかけ、傷を癒してやった。

雪の広場には、まだ嗚咽が続いていた。幸い彼の怪我は大したことはなくて、治療の魔道も功を奏したせいかな、傷跡も残りそうになかった。子供達は、怪我をした子供の周りに集まって、ひそひそと話をしていた。石が入っていた、という声をザンは聞いた。シェリ

ルは、怪我をした子供の頭をなでて、痛い痛い、下僕ガシラのお兄さんに飛んでけーと言い、青い髪の少年の頭をこづいた。そして、君がすっかりしていないからいけないのよ！と言ってじよたを怒った。チャイムは、そんな二人の背後に立って、ザンの方を見ていた。

気がつけば、ザンの周りには誰もいなかった。一人で陣地と陣地の中央付近に立ちつくしていた。謝らなければいけないと彼女は思ったが、それは憎いシェリルに対して行う行為のような気がして、どうしてもできなかった。

「さあみんな、一緒にお餅を食べましょう。」

子供達は歓声を上げると、手に手にきたての餅を取って食べ始めた。ゲームは一時休戦である。怪我人が出て子供達がシュンとしてしまったし、そろそろおやつ時間だったからだ。子供達の見守る中、赤い髪の女が餅をつき、青い髪の少年が合の手を入れていた。黒髪の少女は、つきたての餅を小さく切って砂糖をまぶすと、子供達に渡していった。

ザンは、そんな楽しげな風景から離れた場所で、樹木に背中をあずけ、手袋をはめ直したり、コートの襟を直したりしていた。ミレ―ネに着せてもらったコートは、泥混じりの雪で汚れてしまい、いつの間にか裾が少し破けてしまっていた。やぶの中にカンパチを連れて行った時に引っかけたかなあ。

そして彼女は、やっぱりあたしは一人の方がいいんだと思っていた。いつも自分は疎外されているし。そのせいかは知らないが、なんだか自分でもうまくなじめない。どうしていいか分からない。しらじらしいウソや、建前だらけの会話なんてごめんだ。あたしは自分の思うように生きたい。人に合わせるだけなんて嫌だ。そう、こんな気持ちを味わうくらいなら、いつそ一人の方がいい。

ザンは、もう帰ろうかなあと思っ、一度だけにぎやかな方を振り向いた。すると、子供達の中からカンパチとモヤシが駆けてくるのが見えた。彼らは、両手に持ちきれないほどのお餅を握りしめていた。それから、ミヨウガが雪玉を食っているのが見えた。全く、なぜ誰も注意しないんだ。お腹を壊すじゃないか。

ザンは、カンパチからお餅をもらうと、ミヨウガにちぎって食べさせた。どうだ、雪玉よりはおいしいだろう。ミヨウガは、ニヤーと笑って言った。たこ焼き、と。いや、それはたこ焼きじゃないぞ。

「へえ、ずいぶん面倒見がいいじゃない。」

ミヨウガの食いつぶりを見ていたら、シェリルが近づいてきた。こにも気付かなかったザンであった。ザンは、シェリルを完全に無視すると、じゃあ、あたしは帰るよ、とミヨウガに言った。

と、誰かにコートの裾をつかまれた。カンパチだった。彼は、ザンがいくら帰ろうとしてもコートを離さなかった。そして、いつの間にかモヤシが地面で寝ていた。こら、寝るな。凍死するぞ。

ザンは、仕方がない、しばらくこいつらと一緒にいてやろうと思っ、その場にあぐらをかいて座り込んだ。あたしは、あたしの思うとおりにすればいいだけだ。カンパチは、握りしめて変形した餅をザンに渡すと食べると言った。ザンは、ありがとうと言って、餅をひとつ口にした。

む：おまえ、さっき、ちゃんと手を洗ってないだろう。

青い髪の少年が、びくびくしながら細い目の少女の鼻の下にちよび髭を描いた。彼の背後から、もひとつ！という声が上がった。少年は、細い目の少女にびくつきながら、彼女の目の回りに輪っかを書き足した。

目の細い少女ザンと青い髪のじよた、赤い髪のチャイム、そして

黒髪のシェリルは、宮殿とは名ばかりの人形長屋の中庭で、子供達を集めて、またわいわいと遊んでいた。

「それで、これはどういうことなんだ。」

と、細い目の少女、ちよび髭の片目パンダとなったザン・エルフが言った。

「だから、今度は羽根突きなのよ。」

フリソデというものを着たシェリルが言った。

「それは分かっている。あたしが言いたいのは、どうして羽が2方向から飛んでくるのかということだ。」

ザンは、細い目をくわっと見開いた。

「それは、私とチャイムが同盟軍だからなのよ」

「そんな羽根突きがあるか！」

ははははと誰かが笑った。ぎろりと睨むザン。そこには、ソースせんべいを手にしたカンパチが立っていた。彼は、ズボンのポケットで手を拭くと、ザンにせんべいをひらひらさせて、食べるか？と言った。

お前はちゃんと手を洗え！

「それでね、次は、大たこ揚げをしてみようと思うのよ。ねえ、ザン。あなた、大空を飛んでみたいと思わない？」

「思うか！」

にっこりと微笑むシェリルに、あたしはきっぱりと断った。そして、やっぱりあたしは一人の方がいいんだと思って、もう帰ろうと思つて振り向いたら、ガキどもがあたしの一張羅にまわりつききやがった。

だから、お前はちゃんと手を洗え！

おわり